

マタイによる福音書7章15-23節 「偽預言者への注意」

1A 偽預言者の見分け 15-20

1B 内側が貪欲な狼 15

2B 結ばれる実 16-20

2A 御国から締め出される偽預言者 21-23

本文

マタイによる福音書7章を開いてください、私たちの山上の垂訓シリーズの学びは、7章14節まで来ました。イエス様は、呼びかけを行っています。12節で、「人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。これが律法と預言者です。」と言われて、これまでのことを全てまとめられました。

そして、人々がこれまで聞いたことに応答するように呼びかけておられるのです。私たちは、聞くだけでその時に心で納得しているかもしれない、感動しているかもしれませんが、けれども、それを具体的に生活や人生の中に適用しなければ、それまで聞いてきたことは無意味になってしまいます。それで、応答するように呼びかけておられるのです。その初めが前回の学び、13-14節にあって、「狭い門から入りなさい」でありました。滅びに至る道は、広いのだと言われました。そして二つ目の呼びかけを15節から行われます。15節から23節までをまず、一度に読んでみましょう。

15 偽預言者たちに用心しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です。16 あなたがたは彼らを実によって見分けることになります。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるでしょうか。17 良い木はみな良い実を結び、悪い木は悪い実を結びます。18 良い木が悪い実を結ぶことはできず、また、悪い木が良い実を結ぶこともできません。19 良い実を結ばない木はみな切り倒されて、火に投げ込まれます。20 こういうわけで、あなたがたは彼らを実によって見分けることになるのです。

21 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。22 その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』23 しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』

私たちの周りには、偽物というのが非常に多いですね。オレオレ詐欺のような、偽の電話。フィッシングサイトのようなもの。偽物をつかまされることが日ごろからありますが、聖書は、神のことは

という真理を伝えているはずの人々の中でも偽物が混入してくるのだよ、という現実を、クリスチャン生活をするに嫌というほど知ることになります。例えば、フェイスブックをしていると友達申請が来ますが、全能神という中国系のキリスト教の異端の人からのものです。けれども、共通の友達を見ると、数多くの人が承認しているんですね。クリスチャンが、異端の人をクリスチャンだと思って、平気で友達にしているのです。

1A 偽預言者の見分け 15-20

1B 内側が貪欲な狼 15

15 偽預言者たちに用心しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です。

イエス様はこの言葉を、「狭い門から入りなさい」ということから発展させています。つまり、狭い門ではなく、広い門から入らせるように導く教師たち、預言者たちのことを偽預言者と呼んでいます。人々を誤ったところに導いて、滅びに至らせる教師たちであり、こういった者たちに気をつけなさいと言われていました。

「狭い門」とは何だったかを思い出してください。それは、イエス様が、「5:20 律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」と言われたところの狭さです。律法学者やパリサイ人たちこそが、ユダヤ人たちにとっての義の基準であり、彼らが神の国に入るための道を示していると思っていました。ところが、それよりもまさっている義を持っていなければ御国には入れないとイエス様は断じたのです。

それは、殺してはならないというのは、心の中で兄弟を憎んでいれば、すでに殺人の罪を犯しているというものでした。姦淫してはならないというのは、情欲をもって女を見たらそれで姦淫の罪を犯していて、ゲヘナに投げ込まれるというものでした。その外側の行いは、心にある姿勢から来ているもので、その心の姿勢を律しているものであることをイエス様は教えられたのです。そこから、だんだんわかってくるのは、自分自身にはもう何も良いものがないということです。自分は神の前で有罪であるということです。そこで、自分の義ではなく、神の義、キリストに示された義のみが自分を救うことを悟るのです。キリストが自分の罪のために死なれ、それによって罪が赦され、また神の前で義とみなされるということです。この方を信じ、受け入れること、これが狭い門だということです。これを見つけるのは、とても細い道なのでまれであるとイエス様は言われます。

それ以外のことを教えるのは、偽預言者です。つまり、あなたをあなたのままで救われるとする、キリストの十字架の前で、圧倒的に無力で、罪深いというところまで伝えないもの、それが広い門であり、滅びへの道なのです。

そしてそれは、「彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です。」という形で来ます。表向きは、羊の衣を着ています。つまり、害がないように見えます。けれども、そのことばを聞けば、自分の魂が食い殺されてしまうような、貪欲な狼の餌食になってしまうのです。表向きは羊の衣なので、他の羊も安心してそばによるのですが、他の羊も聞いているし、自分も大丈夫だろうと思うのです。ところが、そこで羊たちが集まっているところで、狼が羊を一気に襲うということです。

パリサイ派や律法学者の教える義は、「外側の行い」は良いものに見えるということです。これが羊の衣です。人の目には、何ら悪いものに見えません。人が聞いて、悪いことはないのです。イエス様も、23 章 3 節で群衆と弟子たちに、「彼らがあなたがたに言うことはすべて実行し、守りなさい。」とまで言われました。ところが、彼らの行いをまねてはならないと言われます。キリスト教会の中で、とても良いことを話し、少なくとも表向きは良いことを行っている、その実際に関わっている人々から、まるで違う話が出てくる場合があります。外側の行いは正しいのです。

「内側は貪欲な狼」であります。イエス様は彼らの咎を責められた時、こう言われました。「23:25 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、内側は強欲と放縦で満ちている。」表向き、正しいことをして、その正しい外側の行いによって、かえって内側にある肉の欲をそのままにしてしまっている場合があります。むしろ、その正しいことをしていることによって、ますますその悪い欲に満ちていって、良い行いと思われることの中で、悪がはびこることがあるのです。

人が、神についてのことを自分が認められたい、承認欲求を満たすために行っていることがあります。6 章 1 節に、「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。」と主は言われました。パリサイ人、律法学者がそのように人に見せるために行っていました。また、金銭的な欲求を満たすために、宗教的なことをすることもあります。23 章 14 節に、「おまえたちはやもめの家を食いつぶし、見栄のために長い祈りをしている。だから、おまえたちは人一倍ひどい罰を受けるのだ。」とイエス様は言われました。そして、独善的になり、自分こそが正しいとして分裂や争いを引き起こします。パリサイ人や律法学者は、何が問題か？というと、自分たちがモーセの座にしている、つまり聖書的に正しいのだとして、それでイエス様の教えを偽教師のそれだとして退けたのです。パウロが、ローマにいる人々にこう警告しています。「16:17-18 兄弟たち、私はあなたがたに勧めます。あなたがたの学んだ教えに背いて、分裂とつまづきをもたらす者たちを警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。そのような者たちは、私たちの主キリストにではなく、自分の欲望に仕えているのです。彼らは、滑らかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましています。」

ですから、私たちは、「この人は良さそうな人だから、正しいに違いない。」と思っ

気を付けなければいけないことが分かります。自分自身がイエス様ご自身に会う、人格的に出会うことがなければ、その狭い門を通ることがないようにするならば、それは偽物なのだと、遠ざからなければいけないということが分かります。

2B 結ばれる実 16-20

では、どうやったら見分けることができるのか？主は続けて語られます。

16 あなたがたは彼らを実によって見分けることになります。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるでしょうか。17 良い木はみな良い実を結び、悪い木は悪い実を結びます。18 良い木が悪い実を結ぶことはできず、また、悪い木が良い実を結ぶこともできません。

実によって見分けられると言われます。ここで大事なものは、実というのは、つながっていることによって結ぶことができるものです。イエス様が弟子たちに言われましたね、「ヨハ 15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」主につながっていて、主の中に留まっていて、それでイエス様が自分に留まっておられるなら、そこから多くの実が結ばれます。こうした関係、結ばれている、つながっているという関係によって、初めて実が結ばれます。これを自分で振り絞って出せるものではないのです。

実が結ばれるのはごく自然なもので、自分がどんなに他のものを生み出そうとしても、どこにつながっているかで、すぐに分るのです。ここでぶどうの木につながっていれば、必ずぶどうの実を結び、イチジクの木につながっているならば、必ずイチジクの実を結ばせます。自分がぶどうなのだと見せかけても、つながっていなければ茨しか生かないことがありえるのです。

ですから、父なる神とのつながり、天におられる父と自分につながっていないのであれば、どんなに神を敬っているような動きを見せても、必ず化けの皮が剥がれてしまうのです。パリサイ人たちは、イエス様が来られるまでは、自分たちは正しい人として人々に見せることができていたのです。ところが、イエス様が来られることによって、自分は自分自身の義により頼んでいて、それは、貪欲、妬み、そういったものでいっぱいであったことが露わにされたのです。

恵みではなく、律法の行いに戻ろうとしていたのが、ガラテヤ地方にある教会でした。パウロがガラテヤ人への手紙を書いて、偽教師たちが教えている福音は福音ではない、呪われたものであると断じていました。そういった彼らが、それでは良い行いをしているから、実を結ばせていたか？というところから違っていたのです。「5:14-15 律法全体は、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という一つのことで全うされるのです。気をつけなさい。互いに、かみつき合ったり、食い合ったりしているなら、互いの中で滅ぼされてしまいます。」そして肉の行いも列挙していますが、そこに、

「5:20-21 敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ」などが列挙されており、まさに律法の行いによって、肉の行いを満たすようなことをしていました。

19 良い実を結ばない木はみな切り倒されて、火に投げ込まれます。20 こういうわけで、あなたがたは彼らを実によって見分けることになるのです。

次に、偽預言者が御国には入れないで締め出されることが書かれていますが、ここの喩えでは、「火に投げ込まれます」とのことです。これを聞いているイスラエルの人たちは、農耕の風景はごくありふれたもので、ぶどうやいちじくは、いつも食べているものですが、あざみや茨は何の役にも立たず、火に入れられることもよく知っています。同じように、どんなに宗教的なものを装っても、実を結んでいなかったら、それは全く役に立たず、火で焼かれるだけなのです。ですから、いかにもクリスチャン的にふるまっている人、礼拝には参加し、賛美も歌う、祈る、御言葉も操れる人が、神の国に入れないということさえ、あり得るということでもあります。宗教的活動ではなく、はたして自分自身がイエス様につながっているのかどうか？が問題だからです。

2A 御国から締め出される偽預言者 21-23

21 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。22 その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』23 しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』

イエス様は、一気に終わりの日について語られます。こうした偽預言者については、なかなかその時は見分けるのは難しいです。しかし、終わりの日には主はすべてを明らかにされます。畑に、良い麦だけでなく、敵がやってきて毒麦の種を蒔いてしまったという喩えがあります。毒麦が出てきたので、しもべたちが主人に、「抜き集めましょうか」と尋ねると、「13:29-30 しかし、主人は言った。『いや。毒麦を抜き集めるうちに麦も一緒に抜き取るかもしれない。だから、収穫まで両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時に、私は刈る者たちに、まず毒麦を集めて焼くために束にし、麦のほうは集めて私の倉に納めなさい、と言おう。』』とやったのです。偽預言者ではないかと知って、気を付け、警戒はするけれども、それを抜き取ることについては、主人自身が慎重になっておられるのです。終わりの日に、その結ばれる実が明らかにされた時に主が刈り取られるので、警戒はしても判断を下さないという慎重さも必要です。

ここに、「主よ、主よ」という言葉があります。確かに、人が救われるためには、イエス様が主であると告白しないといけません。「ロマ 10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたことと信じるなら、あなたは救われるからです。」そ

して、コリント第一 12 章では、「12:3 ですから、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも「イエスは、のろわれよ」と言うことはなく、また、聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。」

しかし、イエスを主とすることは、やはり関係なのです。イエス様に、自分の人生のかじ取りのすべてを明け渡すからこそ、イエスは主と告白するのであり、それをしなくても、主と口から言うことは可能であるということです。主よ、主よ、と言っても、御国の中に入れない人たちもいるのだということです。「21:28-31 ところで、あなたがたはどう思いますか。ある人に息子が二人いた。その人は兄のところに来て、『子よ、今日、ぶどう園に行って働いてくれ』と言った。29 兄は『行きたくありません』と答えたが、後になって思い直し、出かけて行った。30 その人は弟のところに来て、同じように言った。弟は『行きます、お父さん』と答えたが、行かなかった。31 二人のうちのどちらが父の願ったとおりにしたでしょうか。」彼らは言った。「兄です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。取税人たちや遊女たちが、あなたがたより先に神の国に入ります。」「行きます」と言ったことよりも、たとえ「行きたくない」といっても、結局は行くことのほうが、御国に入るのです。これが、主と自分の関係が存在する証しであり、口だけで行いが伴っていなければ、主との関係さえないということになります。

そうした偽預言者たちは、なんと、イエス様の名によって預言もするし、悪霊も追い出すし、多くの奇蹟も行うようです。終わりの日には、いろいろな惑わしがあり、その一つがこのような奇蹟です。イエス様が弟子たちにこのように警告されました。「24:24 偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうと、大きなしるしや不思議を行います。」ユダヤ人はしるしを求めがちですが、終わりの日はこのようなしるしや不思議を見て、惑わされてしまう人々も出てくる、ということでもあります。

そして、もっと驚くことは、イエス様は彼らに知らないと言われるのです、「わたしはおまえたちを全く知らない。」これは英語では、「あなたがたを、知らなかった。」とあり、つまり、初めから知った覚えはないという言葉であります。まったく関係を持っていなかったことです。ここでの「知る」は情報ではありません。個人的に、人格的に知っているか、知らないかなのです。神を知っているのであれば、神の命令に従うのです。もちろん、完璧ではありません。けれども、神を知っているからこそ、神に言われたことは守るのです。「1ヨハ 2:3 神の命令を守っているなら、それによって、自分が神を知っていることが分かります。」

そして、「不法を行う者たち、わたしから離れて行け。」と言われます。偽教師には、不法が付き物です。そして不法を行っていても、御国の中に入れるのだよという、誤った安心感を与えます。パウロは、コリントにある教会の人たちにこう言いました。「I コリ 6:9-10 あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いを

する者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。」淫らな行いをして、それでも救われていると思っていること。偶像礼拝をしているのに、救われている。姦淫、それから同性愛行為、これらのことをよしとして救われると教えているなら、その人は偽預言者、偽教師です。

ペテロやユダも手紙の中で、偽教師についての特徴を生々しく描いていますが、ペテロ第二から読みます。「Ⅱペテ 2:12-14 この者たちは、本能に支配されていて、捕らえられ殺されるために生まれてきた、理性のない動物のようです。自分が知りもしないことを悪く言い、動物が滅びるように滅ぼされることになります。13 彼らは不義の報酬として損害を受けるのです。彼らは昼間から飲み騒ぐことを楽しみとしています。彼らはしみや傷であり、あなたがたと一緒に宴席に連なるとき、自分たちのだましごとにつけるのです。14 その目は姦淫に満ち、罪に飽くことがなく、心が定まらない人たちを誘惑し、心は貪欲で鍛えられています。彼らはのろいの子です。」こういったことをしているのに、イエスの名によって預言をしたり、奇跡を行なったりすることができた、ということです。

イエス様が弟子たちに言われましたね、「ルカ 10:20 しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」悪霊を追い出した弟子たちでしたが、それよりも、自分の名が天に書き記されていること、神と個人的な関係を、神のものにされているということを喜びなさいと言われました。表向きには、いろいろな働きができます。力強い働きさえできます。けれども、最も大事なものは、自分の名が天に書き記されていること、主に知られていること、そこに命があり、救いがあるのです。